

一講

①行としての称名念仏

はじめに

- A. 教信行証と教行信証
- B. 無仏の時と信仏の因縁
- C. 行の仏教から信の仏教へ
- D. み名をとる念仏 名号と称名と念仏の区別
- E. なぜ南無阿弥陀仏なのか
- F. 目覚めとしての南無阿弥陀仏

①行としての称名念仏

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。

親鸞の主著「教行信証」題号

「顕浄土真実教行証文類」

A. 教信行証と教行信証

歎異抄

「本願を信じ念仏申さば仏になる」→「教信行証」

「教えがあってそれを信じて、懸命に行じて結果をうる」

「本願」＝教「信じて」＝信、「念仏申さば」＝行、「仏になる」＝証

私たちの思考パターン「教信行証」

「一生懸命(教)自分を信じて(信)努力(行)すれば必ず報(証)われる」

「思いやりをもって(教)信じて(信)関われば(行)必ず喜ばれる(証)」

歎異抄 16章

「日ごろのこころにては、往生かなうべからず」

私たちは日常

「愛情かけて育てたのにちっとも応えてくれない」＝行に対して証を非難する

「言うこととやっていることが違っているから信用ならない」＝証から行を非難する

B. 無仏の時と信仏の因縁

曇鸞「五濁悪世、無仏の時」

「難行道はいわく五濁の世、無仏の時において阿毘跋致を求むるを難とす」 (167)

曇鸞「信仏の因縁」

「易行道」は、いわく、ただ信仏の因縁をもって浄土に生まれんと願ず。仏願力に乗じて、すなわちかの清浄の土に往生を得しむ。(168)

平野修先生「3つの無仏」

一つは空間的無仏。二つ目は時間的無仏。三つ目は思想的無仏。

釈尊在世の商人の二人

我いま菩提樹下に出世して、初めて正覚を成れり。提謂・波利(だいい・はり)・もろもろの商人の食(じき)を受けて、彼等がためのゆえに、この閻浮提をもって天・龍・乾闥婆(けんたつば)・鳩槃荼(くはんだ)・夜叉等に分布せしむ。護持養育のゆえに。(378)

論註

「無仏世の衆生を、仏、これを重罪としたまえり。見仏の善根を植えざる人なり」
(358)

親鸞「教行信証」「教巻」

「これ顕眞実教の明証なり」

安富信哉先生

「南無阿弥陀仏とは言葉となった仏なのです」

C. 行の仏教から信の仏教へ

仏の印可

もし仏意に称えば、すなわち印可して「如是如是」と言う。(216)

末法史観

正法 教○行○証○

像法 教○行○証×

末法 教○行×証×

親鸞「教行信証」後序

「聖道の諸教は行証久しく廃れ」 (398)

「浄土の眞宗は証道いま盛なり」

平野修先生

「行証が久しく廢れて、そのために仏教が仏教ならざるものに変質してしまっているわけですが、それでも、いかにして生死を離れるかということは私どもにとって願わざるをえないものです。そこで、証を失った行、あるいは行を失った証が渦まいている中であって、その状況を超えるために、浄土の往生が取り上げられてきたのです」

正信偈

本願名号正定業 至心信樂願以因

(本願の名号は正定の業なり 至心信樂の願を因とする)

成等覚証大涅槃 必至滅度願成就

(等覚を成り大涅槃を証することは必至滅度の願成就なり)

D. み名をとる念仏 名号と称名と念仏の区別

念仏申す

「神仏に対してお願い申し上げる」「名前を～と申し上げる、～とお呼びする」(大修館『古語辞典』)

和讃

「信は願より生ずれば念仏成仏自然なり」(496)

E. なぜ「南無阿弥陀仏」なのか

法則 一念多念文意

如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。自然に、さまさまのさとりを、すなわちひらく法則なり。法則というは、はじめて行者のはからいにあらず。もとより不可思議の利益にあずかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを、法則とはいうなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを、法則とはもうすなり。(539)

F. 目覚めとしての南無阿弥陀仏

善導

「帰命無量寿覚」

南無阿弥陀仏

↓↓↓↓↓↓

帰命無量寿覚

正信偈

帰命無量寿如来 南無不可思議光

元氏義照先生・藤代聡麿先生

帰命無量寿如来とは永い間迷ってきましたということであり、南無不可思議光とは永い間お育てをいただきましたということである。

「末代無智」の御文

「ねてもさめてもいのちのあらんかぎりには称名念仏すべきものなり」